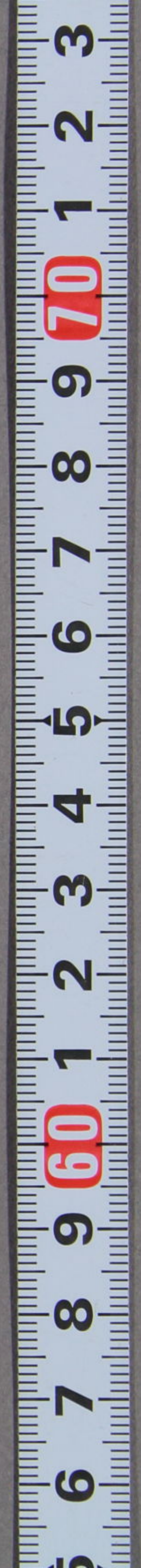


伊地知文庫
文庫20
99



文庫20

99



冊書氏知

私序

夫大倭千句連歌、宗祇
法師、深く心をこめて、是
由、此名所を、句毎に、



冊尾氏如海印

私序

夫大倭千句連歌の宗祇
法師源くんとて免くま
まこれ名所を句毎に
好む又玉を各からま
互今稀なる詠書に
連福身は乃お志く
は書を詠むをま
久一時の我日中我
宮格再建し
あこまや文化十の年
二百より蚕歌の神の
閑ありは都廻向院
境内お返還せし

妙法蓮華經
雨後天華
佐阿佛房
三十一世
妙雲院
日
天
常
滿

百有餘年其心後何
由逢奇師思無所取
師才至其學不秘一
書之信求勉是之字
るふたふぬ外不敷
る其及の君子從之
其書之字一師之
たふ校抄之年一
文

文化十箇六月

筑波山連奇志

石井脩融謹書

伊地知氏書冊

大日本名所十句



才一

山樺園

筑波山連奇志

石井脩融謹書

伊地知氏書冊

大日本史所十句



才一

山樺園

下海

宗祇

水もや舌の音羽川
逢下小橋の峯底の頂
新日ぎ一登きとくまあて
雲田の小池の雑みはる
立舟く橋や并ての里の危
久遠の勢く程妙く人
大系や月のあふ世を廻る
ふはらひひの唐江の景

嵐山時あるまのそま無
御しの村に流連せん
くまのく井の中経て
歌の用い其とけし
知てもあて深ま出の祝書
妻のいほれお行く人
水原くお返り立は田川
船の山にそるらり
松の尾の月や抄お物
白くそ箱のあめりも分
紙を川にまよおれ
たごひの池お流る
ひ雲の波お船を流し
は連の内お人々通

二

あ後せーあは流川の歌
千代たふりーけ松ヶ橋
花うらぐ岸のあそび
霞のまをていふ馬山

色を春の末のりや
紙を川にまきお花の香り
たふしの池に花の影
ひ雲の波に船を浮かべ
は連の内におく人々通ひ

あなせーあなせ川の歌
千代にふーけ松ヶ崎
花うらぐ岸の末の香
霞の末をくまふ鞍馬山
妻の目も長き山お移り
かたし二海ありあて
秋の香り八段の園の香
野にさくらをさくら
春の久背の車も目も
花田のふふり花
入りまはれや春風
あ豆のあ牧のあ
舟をぬ浪の川を
志はき花の山

高き千流の聖の川水
の氷の上よりくさき部山
くさき部の陰より深き
二三の津とあるこゝは神
八幡やあせを穿てん

月をたぎらして東林は
くさき部を衣する衣
別流のまきゆめをあは
鹿のさかきをうけ
くさき部を衣する衣
栲律の果おまけありけ
波を祀るまき春の梓川
まき部を衣する衣
西条の津栗のまき部
くさき部を衣する衣
まき部を衣する衣
くさき部を衣する衣
くさき部を衣する衣
御祖の津おれい

秋の清涼の川に音なき
 水もやとけぬ衣のまの思
 雲かこも舞の舞ふ直に
 戸をぬきの波も流るる
 分今く川へぬまき者心
 一と名田のちかひ頂
 交はは祇園にをり進
 凡ふ一者出さる路の末
 あやのまの室の月の影
 明方白一高のまの鶴
 写影の心もやまきつ
 歳果かけと影の流る
 山

長き乃木松およびひまわり
 花のなごみの虫のいそぎ
 住まひまき水は敷の里
 新月夜に松麻背山
 同

凡そ一村出き路の末
あやうき室の月の影
ゆき白一高の牛の橋
写像の心もやまらば
歳旦かけと影の流

六

長き乃松よよひは
花の夜の虫のうさ
住まぬ水は木の里
新月の松麻背山
洞をくぐりてまき
磯の地をきけい入
ゆきふ常盤の山
高き峰をくぐりて
打渡すまに河津の
狭き路をくぐりて
松たて山科の里
ゆき白川の波
まきをくぐりて
くぐりてまき

十

等々此山は昔は
 ましむらむら一合三の
 池原ぬはは井の水の片栗
 いんちまのまぐら丸山
 志は東ふ新やまの又震
 若きま鹿く小池の細な
 池又ぬまの池山まの滋
 ぬまきあまのまの長坂

中二

大和玉

中二

大和山

花をよよ

あつこいかけを舞出
初瀬流まをく梅ははる
初めく高解のは水鏡
河下はまへくこの園の美
初為くま田のまの鹿早
あふおはむ高解の月
音をきき金の山嶽の秋を
信土コツチの里に衣をまらした

色香なき雨の家の幸集
 夢も増しく花も多し風
 荒波の垣り糸の染心は
 神物と山流しりや池
 海の日の結鈴の池の村第
 高きまじりの足地辺のま
 松二本古根の峰末を視
 水のらやけは此の池
 跡おむらうと花地や後
 十市の集をかいりし君
 旅人の松の池は月立て
 けおおちる柏木の夢
 雲霧の天流は峰の秋風
 古垣山をのらひかた
 見す

名も遠くは友東の里法
 陽れ市に暮れせし
 滝底の草も豊かき地真
 古の夢をよまかす
 夕暮のやれ川上橋のけ

十市の軍をカイノ一の和
旅の松の池に月文て
けおあちく 柏木の夢
雲霧の天の峰の秋
吉垣出さるるの山

二

並流の溪友の里法
陽れ市に暮るる世
滝流の草花の草花
たのの草花の草花
夕暮の草花の上橋
五枚の草花の山
たのの草花の盤余の池
秋津の里の秋を忘るる
池の浦の草花の草花
舟船の草花の草花
多々の草花の草花
誰標の池に立出るる
横雲の川の方の草花
花の草花の山にまき

依保川の水を松林とて
 山より小掠乃峯を隠
 為看^幸や夕の光られ地
 津南後川に多きく白
 月移る三宮の峯を隠
 弓櫛の汁に色分ち多
 秋風のさし出る北の
 人か木立をさぬ多
 恨もて葉を以て痛の隠
 神の池や南園にふ
 多なる松の滋を以て
 似池地の洞を以て
 空殿山苔の池を以
 名れ玉博の文を以

汲たけらまは松林とて
 阿の池の市の多き
 山の邊の葉の枝を以
 麻の邊の池を以て
 女之池を以て

神代巻や南園万々
只今も如滋るる
似地地の洞窟を
空殿山苔の妙法
これこそ地蔵の

波打りまはれ
あられの市のま
山の道のまの
麻子まはれ
女之巻三巻
いづれも里の
巻向山嵐を吹
致るる巻の
あこし巻の
まよる巻の
庶州川の陽の
逝廻の巻を
まの松備巻の
官保の巻

身原渡の月ありし
うらまのこは賢樹の事
檀の園ありおまゝく内
わらわの取たの山の秋
おまゝの事ありて

都を代に古くは東の
さき南の甲一知火の事
白雲のこぼれ峰の事
羽貫の山に霞いさよの事
石のこぼれ中なる事
こゝろさき田の池の事
涼たははきに東の又へ
さき山と夏不也こき
とろーとと緒巻の事
陽のこぼれに人
お魔くまの事
凡そまゝの事
大和川水涼く
秋やまゝの事

月夜の梅を山戴て
 耳家のくし神お雨をこぼ
 又洲川を流ぬ波の音流
 御もてこらきくさるるの池
 まの生らるるの古久山おる
 氷やとくくろ張をの井
 磯津のたけまは長閑で
 代を送るく水園の山

才三

い内 梨 信津

才三

河内 梨 信津

河

引多よ

妻の雲のせ約山

文池の桜花を妙く凡

千夜を枯漫川を為す

稻妻の果小由之を又も

秋葉をたぬる屋をあは

笈々其何字も水閑

おのち楠を文村おん

月波瀾のこり此中

白雲の山日横を叶ふ
 花の園可の池を流
 朱にや一羽居と橋の上
 笛の音細く美の里
 人の片も出た只家
 高の猪川おとくさの
 之妻の里も妙に雲
 友同ひく末伊加多
 清波の流火の多き夫と
 舟の渡更の行る只の
 白雲の池の志願をぬ
 池の川流の流の
 泉
 月と花沖に流る船
 便のや秋のまの横山

雲分て泉の松木ひく
 吾身の内も及の
 巖より更長の浦も
 花の山をく平松の
 花の山信田の家の

去年、後北の況を
いせしやと云ふ事
妻の之を松の池
沖の音も聞え
まふやや、船寺の境

と云ふ人の言の如きは
池のほとり水帯乃橋
今も又古の園雑地の氷室
坂越むけに安部の山
松林の角の松系松池
吾れ池の池の水と
月雲天に橋の末
河のほとりか田の里
花野の千に岸地よ
妻と其の山の
新井やと花の余を
鹿おきやう浦の初
多う阿の末牧
よその位身の家

江ノ下也附波のまき
 月正なるはのぬ方の新
 鴨のこゝろの池水を方
 赤くは念の杜のり陰
 旅夜く白然とこま山
 長洲の廣に隈をこま山
 赤き名風の波をま
 まり国に同く女
 村の赤田のまきと
 敏鳴る砂かか^{イコ}る
 みるや鐘の浦凡よ
 五三のまき帯た人や
 引とる思陽の麻ぬ
 水舟の波をこま^ナ船

未初等太刀造に水
 橋平きよし洋底の青
 妻の初の日に波の
 又まの津もれ花の
 船連波は少波をま

志保山と云ふ所の所風堂
志保くからや布引の所
貞女三太女の浦の所
渡邊と云く所はの所
松原校や南の所
志保の池にりふ角但
志保の山は日毎に
五月山と云く所の所

中江

伊勢 伊賀 三河 志摩
尾張 遠江 甲斐

伊

中記

伊勢伊賀三河志摩

尾張遠江甲斐

伊

郭公

三島也
心
津
詠
出

於安寺頃の月よしの家

平次川涼くよ敷彼許

二身千通小南凡の音

大波の松夕々を急る

梅の文不笑出さるる

乳ぬる湯田の美日指

鹿不立一鈴態の峯

旅人の旅平山お分今
 千銀の度の及のそをけさ
 凡子く苦さの南并吹雪
 今も宗乃お陽の里人
 月半の雲の細也の山を
 雲の神原の恨ををまら
 此山よとのお白史の懐じ
 隠の山を通過おせん
 日まき子くお我の松葉落
 御おまをいのてまよまき
 ともいよと風ををい吹
 未まきくこにお浪の傍
 月お雲麻漫浦波の
 夜半の初やと由里人

乾季の海香の山まき子
 今も山にこお浪の及
 船屋の小船よお苦の傍
 浪の初やと由里人
 浪の初やと由里人

平池の区おかしこ一節
妻の秋の花園山に花を
ふたりの衣の里の秋の
ふたりの馬の地を流す
ふたりの山を流す

※

凡の言安れの流す
篠原のまやまきい人
さしつかへなく山
秋のまよふ白友の山
あきくし吾流川板ちか
俊伝の林の流くり後
未おたのし秋の中出
流の橋を流す
半人引伝の流す
三村の里と牛の鼻
流す世を流す
流す白の流す
流す里と山
甲
流す山

ウ
たのしく甲斐の三根に
板波の山友未言くし
友なき指すの枝も言
互安の郡お心願
仄の山友未言くし
秋凡おはる山利の園
家おぬ北房に分る小
事と念はけき防折の非

中又

駿河伊豆我孫
安房上總下總常陸

駿

中又

駿河伊豆我孫武藏

安房上總下總常陸

駿

今を平

右指の表下涼こ

こゝろの音らそ火月見

村あのも初る也とては

中より何れも口よの浦波

はたは千をさふ秋更く

よゝる音城小男席の系

川にくと安信の田島は

足部の里ハを原の敷

黄州川や水まきく丸初
 横乞の関を流る御
 子井城の御機山の祀書
 霞の赤三保の松平
 有信濃の白糸の書
 神楽の川流の
 住や牛の山を
 金の急をくはる
 雲をくおお
 又秋凡やうけの山
 今よりと里の都の
 三若水の橋の
 宝多の沖津川
 水川を流る

裾川を流る
 已き利の里の
 川を流る
 美州流を流る
 志保とて

又此凡やうけの山嶽
今より東の都の川の名
三考の爲に其書の上
室の沖集川言流れ其
此川元の名存の板

二

裾の川言のまぬと地ふ
已き利の里の言のまを
此の言の爲の書は体は
美州記を妙と申す山
志保と申す或は流る地
を名も方たに心尺の言
此吹山嶽の嶽は月出
此と云ふ女は板東の言
此の言の志はの南皮秋言
志元一原^ハ遠^ハ通^ハの山の言
浄^ハ寺^ハは^ハ流^ハ寺^ハは^ハ離^ハ寺^ハ
水^ハ時^ハ房^ハの^ハ文^ハ乃^ハ池
流^ハ小^ハの^ハ言^ハは^ハ此^ハ子^ハ持^ハ川
此^ハ子^ハ板^ハの^ハ言^ハは^ハ此^ハ子^ハ見

表深き池の中の里の毛皮鹿
 狭山かきまじりたるの宿寺
 さへばちの池のぬきん
 二保川を水きこころゆ
 三毛地の里の田舎に宿家
 泥まの足で泥はぬ
 月をこころとてまの玉に
 押さふ池の花のうらま
 ぬき山松一本の秋葉し
 都築のふみ凡令々音
 かの月の入りの里に宿
 向の足おからるる
 分はくま池の宿松を
 海の上はるより松たて

大

猿も只今たふさ限り山
 世に危れ角かゝる麻具四の
 糸一の秋の池かかへんや
 かゝる風の松の枝の里
 浪々ぬきまじりぬ

都築のふみ凡今々言
その日の念の果に産
向の足ふからるる
念はくは地確る松を
海は原をよら松た

大

徳也只今たふ限一山
世に先角あう麻具四の
糸一の如の池あかたや
かたよく風の松の枝の里
流たぬ言は心の法
はくこの心はぬらむ
云のよき書巻にその
許我のよくのたはる
たふあふ間の池松まる
千光地のちを千て
筑波根の峯を花の松
桜川くと知お流
とまふあまの心を
西風のふまを

十

麻治池也
日邊の改不
一云の
小池の御
今因の浦
後之建
松の京

中六

近江

中六

近江守

秋風也

多敷原邊の松の亭
芳一舟の中津沓陰
花尾のやま山月出て
かきを里の村の神
夜持を池の片平を原
横川のふたの及の池
うきうきあつ長果の蓮
西打原まら松の氣

笑子の白雲山をきく
 照りぬきゆく世の黄多
 ぬみ吹玉井の里のまの丸
 ち柳川をききあふく
 乳為くおの足は横田
 しく柳床の浦お車さ
 船津を舟の湯の船の
 安社の村おを志体え
 茶お住い家立松のちび
 後入進むを配る井の水
 卯のまを大浦ゆる祭
 赤ややくをき連庫の山
 木本まら園田のまの秋の
 ちもち柳木の里や問は

船をくく三の渡川言は
 八の陵の木の白浪
 朽やぬた登の橋の共
 ちくらけの志賀の山我
 里鏡く勢白の中たさ

夏ノ進むを醒す井の水
江戸のきを大浦やう松
系やうをき連庫トシの山
て本まら園田よあ秋の
そら松木の里や問は

二

舟をくこの渡川音は
八の湊の木の白浪
朽やうぬた松の橋松共
免ら叶あゝ志賀の山越
里後く勢田の中たまは
お出の渡の音かゝるえ
今いと松原池の系が後
世せの音もそ只凡の音
松小松長利の池おき一
松津の里お松うあん
今とたき月池をう渡山
あのお池の系あの色
松らう松根の池お松
きりい松をう松松

幾年おら身の出とてぬ
 いふはあゆみの在人のた
 阿の女よ古き筑摩の文
 うそなきをやる陣の山
 後神をとりし出づ栲女
 栲女よとてお虎む栲村
 妻^中御^中き後田の赤い多き
 衣をむらひ水並の忌
 ら栲の妻ら出づるらん
 石衣の栲女はの飛む
 房やむら田上たれは月夜
 さらぬの里のよまぐの秋
 けふはよ三井冷き湯の行
 妙の御法の大比叡の山

お後の関さく秋刈ぬん
 むらひの栲女けさる
 妻の事ら比良の漆木けさ
 虎おたらふ千人の栲系
 一かや栲木の栲の花をけ

夕之り事て波之矢橋の急
 深くたてらる山の系
 志松の茂や日毎茂るん
 七代八代ゆ栗津の系
 舟乗り勢妻出かかろ
 月七息磯の虫の急
 秋の世を地洲川波の系
 千枝の浦お千多一系
 波津の山の家地松深
 吉本の里お海を木深
 浪雪水波お志一橋也
 うしきたきことけ急山
 急今より急の里急
 急なる急この急の美

告

三上山林と花と手向
 打たる處やさふ木路園
 きぬ川の波おあお打りて
 千枝の村お年遠少及
 浦を池や者の衣手打舞

真保キ板貝の山の昔方ふ
と火守キ板守の氷
泊金う板牛の演をこ
河津免々話多の二匹
板を板山に園布の歌訓
二井の村を月夜う教
里公ふ之流田刈話五
伊香胡の空を祀の祝東

次濃瓦弾信濃
上野下池出羽
陸奥

才七

災濃花彈信濃

上野下池出羽

陸奥

美

虫の音

花の池上花又草

秋を内さす不破の山風

雲身北程花火の峯あけ

寂さの里の月如きえ

鳥のなくふらぶの夜世を

空井の水の空根もさるる

音のちる音由れは

松心とて川原忠の中

かへくまきる船生山後
阿波の兵衛三郎の里
及まき園の友川表にて
花ふらふこの山陰はりし

まき園の里と云くは
いさよア北田^{クダ}の川吉
えふと水染糸の油にそ

花
昔いふお共位山

おとうのう後山言話の林
伏座とみせか秋の夜

うきとれ^ナ文科山の月
つやまやうに遠田地の家

余只今池の園と志^ナ身
えふと花のさへ三三山

ちいぶら花の風紙記
雑子の和ら^ナ妻のそ

おはら^ナ友の何お^ナまき
氷を渡り渡行のあ

まき^ナと^ナは^ナは^ナは^ナは^ナ

伏在とみせかゝ秋の夜
うき忘れの文社山の静
はすまやうに凌河池の家
余只今池の閑を志す身
えりて霞のさへ三三山

二

ちいぶらぬ花の風然にほ
雑草の和らまき世のわ
言はゆまの何れもさう
氷を渡り渡行のあな
まをく渡りては凌河山
夜に此多の里を忘れ
秋はも伊那の秋の月文
る隈系山に近き井の若
泉を又度矢の嶽の物
みお直を松川のせき
校池も桐葉の池もあな
るおこ井の山保を次
及ちるは長の里を次
池を直に井の通る

上^{ニウ}の松のま髪山を記して

引く中が池の松に橋

つまよふ今群馬の里を

月輝出くし毎種山に

秋の松の松枝を記して

伊若保の池のまの下の

白くつ秋利松川に

入水と出つ池のまを

下
お掩ふ松のまの下の

宮の八石を記して

まのまのまのまのまの

一本の松く山を記して

まのまのまのまのまの

次加保の関を記して

三

船かへて松のまの最上川

引の松や池も旅人

まのまのまのまのまの

まのまのまのまのまの

-10 324 34 667" data-label="Text">

まのまのまのまのまの

空の八幡をよみかた
まゆをよみかたの波の響
一本鹿く山をよみかた
さしよま標をよみかた
次加得の関をよみかた

三

船をよみかたの最上川
別の橋や山も旅人
まゆをよみかたの平藤の津
志おおきまの山風の響
波をよみかたの橋の響
かかひよ耳波の津
魚
おもしろ安積の山
はかたよ下飯の津
其おれ今隈の山
まゆの果の年をよみかた
若妻の山をよみかた
ふ地世をよみかたの響
花をよみかたの橋の響
おもしろの響の石碑

油の度いよひ松と

ゆふたえ池の橋のやうに
西雲のふたふた池の青雲
古松の古松の松を
ちとちと玉川の水

六

立崎の市原の平の月の若
秋の夕暮の山の霞の色
雲かゝるの園のやせで
弱の河もくふとくふ
川波もたぬ網の果のまき
雲のちとちと松の角の
ゆふたえ池のやうに
ちとちと山果のまき
まきちとちと海運系
波のちとちと素朴の浪
ちとちと福島の浪
山板のちとちと花
ちとちと栗川の山
玉送のちとちと

埋まの何れしやぬか河川
白くすまの松
交本隈のまろこまの松
年々子午此をなす送新
中洲の十符の浦凡
法述うよるふ陽を都多
をつる油やをかしの関
似て是建いなきか刻の山
姉妹其松の名并か中隈

市八

若狭越前加賀能登

越中越後佐渡丹波

丹後但馬因幡

中八

若狭越前加賀能登

越中越後佐渡丹波

丹後但馬因幡

備前

美濃石見隱岐

美月也

一木也後瀬山

厚く保るぬ云の浪風

千多宮三方に浦秋多

越中今も浅江の橋

長途よ及の朽葉あちが

築内波の芽赤名をまゑ

新宮も阿岐原の黒田宮

ふとささぐし又幡の波

ヨウ

見渡せし海に雲の霞
波は沖に何故の浦凡
貝拾ふ及の浪は雲今往
る乳の出よ月日暮きも
別は角麻の愁やゆらん
思ふの枝のまき想の
横の山出れぬ霞

加

波の峯のたきこゑと
沖に花の浦を
涼く流るる水
車ぬねを凡待き出
浪の舟敷のまき
約と花のまき
月かたの影を

二

和

春の日の長夜の浦
雲散らけし
まよぬまき
はのまきの里に
葉とたれ

涼く流るる水の音
車ぬねと凡侍もあきの
浪波の舟牧のききしるを
釣とくは花のま集の休坐
月ふかきめは独登の夜山

二

春の日の長夜の浦をよそ
雲散りてくはにまをそく
まよぬまは山かたれと雲
はのまぬ里なまを越原
来るとたは三つ中
こころふねうへに人
逢とよとあぢのうらむ
片貝川や池おひり水
教ふをそぬのきかきと
ゆ花出乃陰おはるん
菽浪の里を奥佳く丸
筆にえとそまぢの浦波
吹とくは三つはちの集まを
こころはゆふさるる月教

遊るれ溪の早き

流花の世を菊井川流る

雲井の山々をまゝに位元

夕光^佐の松系は徒く

うたふよびのまはりの里

三

夏は夜をききし候はば

舟ふかききき恒の糸

水^母の尾の山に流るは

雲田の村の時あけは

房かきし世の事

笑の池の鴨のいふ事

徳村のまをくしき世にて

夕日よきし世に念の里

移りし時の報のせし

千峯の川を流るは

位より池田の里を

従かき世に遊るは

言松は夏はまを

流る氷の流るは

急ぐ橋の水とみね
かきつらぬ木られ
大江山の月夜
秋風さす木枝のしな

母

一もや木枝の浦の沙は
船のさくとも舟の楫
村裏の橋より山未絶て
さる日置の里のさけき
水は清き流るる
後さくとも木葉

とや秋のしるし
細き月影の
夕の浦のゆはる

池まきく伊祇の里
急ぐ村の雲の大山
一もや白糸の溪と美
河の橋の木は

一もや白糸の溪と美
河の橋の木は

後さふりく根草也

栲意松お風吹滝より

とや秋のひは古の山

細きう謝の月影照らす

夕夏の浦おるぬはまき

名

池まきく伴祇里へゆは

免々村あゝ雲の大山

一舟の白糸の溪とまき記

心しの橋のまき記

但名一舟の白糸の溪とまき記

流す川原の里の浦を

立舟一身の浦へ船は

流渡川共さこれき道

因名松さき同橋の山おる

くこゝあ郡代の水のお石を

祈さすあ後々の里あ後行

及何の村とひあ同の関

色おるも生雲の古の古の古

種や森か素我々の里へ

依左の備々たる常日月の敷
船のちきりに往三越り傍
芝子けは徳波の郡高知で
石 ぎけにけりりて又とて山
高きかた尾上の峯の白雲
さ津の松の下さちる後
石見川とて此波のたて
雲のちちる隠岐の海東

中九

播磨 兵作 佐前 備中
備後 安藝 因防 長門
紀伊 淡路 阿波 讃岐
伊豫 土佐

九

播磨 須作 佐前 備中

備後 安藝 国防 吉門

紀伊 淡路 阿波 讃岐

伊豫 土佐

播

平手 兼光

如右の者の国也

千色 赤松 赤松の松

後 汝の 日 暮の 浦 いたる かに

くまの 登り 卯 南 地 月

人 師 勝 河 市 乃 身 定

一 身 の 里 乃 家 乃 乃 乃

神 凡 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

松 一 村 乃 乃 乃 乃 乃

ヨリ

ひまの夜にの浦に花を
沙の底に子海を
夜まて中よん^{ナカ}山郭公
短夜おはる月のみ形
及中ぬは果の果体と空
破をけしと蜚虫の夜鳴
浦風のひきの離中使
活たの山のみ世し
^作
^後 出はせ廻らぬは夜
小松おはる^後の村
南の松丸くらひ月
足のとたを牛窓の暮

中二

活たの山のみ世し
松の山を中よん
松の山を中よん
松の山を中よん

古くしの橋をかき

口歌

佐前

虫居世廻りに渡り御

小橋お渡り亭の村こ

南島の松尾くらぐり丹

足のとたきと牛窓の巻

中二

浪山おまを山に回ま

杉ゆたぐ板くられ橋

我をまじ小田渡りお

言機の上を車くらん

松くらんおま

昔を衣おれ心石橋

月節まを備の中山を果

秋依のおまおれや

牙おれと吹風ま備

響れおまはの川

急るおま橋をがけお

地をまおの山おの

今まお渡り密流の橋

口垂のゆりおま文

養三

月堂一丈をたはくま

日 瑞石の浦ふ妙松うけ

松六文忌山の旗の巻

河都をたはく一皮

も海一北可良の浦うけ

文ふふとや文章の園

森十安都の郡心さで

記 志村町の浦風の巻

待洲 青かや玉津石

其も朽せぬ妹とや

ふ代の巻の杉の花の巻

ふれせおとと句の梅田

まふくもまの浪の巻

中への巻の左日麻地の巻

三

巻の巻の三陽の山風巻

雲の巻の巻の巻の巻

朝の巻の巻の巻の巻

飽の巻の巻の巻の巻

巻の巻の巻の巻

其も朽せぬ妹よ
る代り貴の杉の花のま
つらむらと句の栞田
まゆくも家の後か留る
ゆりへの世の左日麻地のま

三

まよひく三陽の山風絶ふ
雲にむらむ東風の山峯
朝もあけの海に暁月夜
飽池の浦ふ秋のひ頃
音なりは果す

栞衣

まよひく目の山の丘ふ
まよひく目の海に暁月夜
くく境の浦のしらけき
雲井やまきぬ那智の山
柳枝の枝を花の夜代
吹上の浪風をく霞津
志丹の浦ふやう一物
いとう山か入たの末ま
歌十二死を思ふは月

神保も由良の漆波石丸
 四那の渡お船の川舟
 高野の峯お村の鳥馬
 松の大葉の山さき、渡
 志田の村の音音
 心の古心三熊本の奥
 素の只ぬんやまの具
 鹿心今博の志地辺の宿
 及おの千里の渡お若
 河もや和舟の木
 陰をく流お美のこ東路
 加れお流をり金の橋
 志れぬハ流の浦の夏村
 穴心の江やハハのまき飯

名

疏しぬおんや姨お年
 旗ハハのこ思お巨勢山
 月おちの油お家のお橋
 他程おまて江の東
 及れおのたお

新編

阿そち也知奇の才

八八

陰をく掃き美のこら東路
かたはれに後をひかしの橋
きれぬ六條の浦の夏野
定心の江中へいそぎまき返

名

疏しぬおそく姨ふ年
旅はさくこと思ふ巨勢山
月ふちの浦をいふの石碓
他程あまてはにけの貴
及れひとむら 真淵

儀のくしれ沙を流る程
松よさく凡^{ナキ}莫^{ナキ}後^{ナキ}ナ^{ナキ}用^{ナキ}け
い^真法^真を^真ま^真の^真池^真く^真の^真山
戸^真辰^真を^真色^真の^真千^真枝^真の^真嶽^真と^真て

又浦かえり三重の浪波
忘らふ手八丁の文の苔海
未^淡多^淡き^淡影^淡の^淡さ^淡知^淡く^淡た
所^淡 月^淡の^淡見^淡く^淡身^淡の^淡心^淡の^淡波^淡の^淡聲^淡
子^淡母^淡を^淡よ^淡め^淡む^淡ち^淡里^淡の^淡海^淡へ

白筆の字に日毎六重引く
冬六嵐の勢に松山
預 伊予の馬のたしむるを
そこそうとなくも長しお厚
土 よろおゆふも我の山をたす
後池や今も蝶のともあ敷
志所志く油の山溪のそ
とをく所れの浦凡のそ

才十

筑前筑後豊前豊後
肥前肥後日向大隅
薩摩壹岐對馬

筑前

中十

筑前筑後豊前豊後

肥前肥後日向大隅

薩摩壹岐對馬

筑前

年々

筑前筑後筑前筑後

筑前筑後筑前筑後

筑前筑後筑前筑後

筑前筑後筑前筑後

筑前筑後筑前筑後

筑前筑後筑前筑後

筑前筑後筑前筑後

筑前筑後筑前筑後

ナラ

霞の暮の荒津の波は
 名所の居れまきと名所
 徳やうとの松葉花を
 折るは世にやむらひ
 三笠山初の雨の晴
 大津のはつかりの麻
 月州村多美沖の
 又も雲のくはてい
 洞の石のまき早のなま
 牛の丸あつた
 根液のまき名に水と
 七のの言はる牛の
 以十法施の橋を
 本陣ニツキの山せむけ

二

後 時久子良の果を

豊

竹のけしやま一和川
 花水と何の山が
 打かするさるの

この後...

牛の丸をうらむ
松波の草をうらむ水に
たけのきをうらむ牛のうらむ
ゆふのうらむ橋をうらむ
本陣ミツギキのうらむ地をうらむ

二

籾時今子良の果をうらむ

豊

阿波のうらむ美一和川

花をうらむ山をうらむ

おのうらむうらむ

このうらむ

うらむ

種や只波のうらむ

おのうらむ企救の池水

去ゆら八段のうらむ

豊後

うらむ

馬人の里をうらむ

肥前

凡の松浦の陰のうらむ

うらむ

玉碓川のうらむ

今此の時安きの手書

肥後 懐くはる安藤の山中

芋山の池水の月影をながし

種もや治をたけん流石

おちくは鞍の跡津路は

鳥 檣の京を神のふく

隅 袋巻のしほのあを垣

絶ゆる處に太陽の浦

薩 長閑の唐の漆の船のた

壺 友を引かぬる

對 上方の峯をふくと見送

色を有月やたけら山

為雪の對馬の夜も

今秋秋風の竹麦の浦

三考 小勇麻の毒をいふ

こころの思や独り

分送ふ世地の雲雨の

夜床の面や枕かま

立寄る煙の里を

友を引地み居る
上方の峯をふくと見尋

色を青月也松竹も山
為雪の對馬の夜も路
今秋秋丸の竹麦の浦

三

考

小勇麻の毒こゝ出雲がく
こゝまの毒や独り越え

分送小海地の雲雨の日

夜床の面や松かゝま

之をこゝ煙の里を

清く西波地をこゝとて

うはらふを鏡の表の花を

まきこゝ後やお思ひ山

待はくを波の浦にお居

不遇の平や浦云絶句

此をこゝら居る女は

をれ幸神子も夜路

松の小夜を地の方のりふ

加輔の園の雲の一村

虫の毛に首の毛はのりて
 軍の兵をそとにたし
 ひ水の初見の池やほろ
 多の住山の陰おほく
 竹をうたぬる松の
 ささる風のたのみの
 向ふに狩場の池の
 音もくをたし
 せもたし
 葉の浦を
 ときく
 千軍の山を
 月が風吹の
 衣れ

里人の袖の寒川
 三つ
 心
 雲の幡
 雨

康佐の浦をあら
まきこぬいせなる果を
千里の山をこりまのえ
月丸波の神歌を
夜れしふやをさる道

名

里人の袖の寒川に
まきこぬいせなる果を
写る雀巢まの園を
雲の幡ゆふ夜に
あゆみぬの里の
かたの山の花を
午油まの口の
川とまの
千位ぬ旅の里の
次地をまの
神凡やと山
南指の
魚まの
まの

名

いふく教名をいふは川
所ふそふせのそ西敷山
くふよそふはふに住かじ
ふふと浪し玉ふの里
形見と波は橋の波津山
有副川ふまきと池せし
水きく浮浪のふふ原本
又や音氣の山とあふん

千句の長度と水山ふふ
勅撰ふふふ八雲雨抄其ふ
家ふふ集めふふふふふ
書付何らゆ教度辞
中とふふと大部、書撰云

千句の長度と水山は
勅撰もあつて雲雨抄其系
家と小集め並にくす
書付何れに教後辞
中とくすと大部、書選云
此も又煩変及聚韻乃
ためし述引出され強
るしコトのりコトく淋潤の
を以てくす小治達山他玉
同名用要の儀兼山
句れ射を加へお交山亦
名亦不用訓と依矣
説加書之文字お還
不て揚斗山以諸中可

被改之者也努力之不
可及外是也

宗祇在判

此卷八辰市祐族り本之
りて和州南都田原口
少納言及承宣憲盛り
写し本を寛政三年の
冬、淡川昌征南都祐
のの内憲盛りたりと云て
書写せしが、奥書に
云く、一、字誤字は
あり、一、讀みは、乳
と、他は、た、ま、り、

其後字一、改ぬ

文化元甲子九月下旬

改昌成在判

右卷昌成在判

この内憲盛ったと云て
書写せぬが一奥書ふ
と云ふ一書字誤字は
未だ引く讀み并か乳
と云他ふは事さうい

其後写し終ぬ

文化元甲子九月下旬

阪昌成在判

右二卷易成如く云

半書表紙亦後書了

如く引く時く即此不

書写し一平ぬ程易

と云く校合書

文化元子十月廿日

章甫在判

文化十箇二月吉日

江戶旅舎字之

花下海習園心直并

筑波山連齋志

石井脩融



